

## ツングース諸語における譲渡可能を示す接辞について

風間伸次郎

(東京外国語大学)

### 0. はじめに

ツングース諸語の所有構造は、一部の例外（ソロン語、満州語、シベ語）を除き、一般に頭部表示型（Head marking）で、所有者を示す名詞には何もつかず、被所有物（もしくは被所有者）を示す名詞に所有者を示す所有人称接辞がつく（詳しくは津曲 1992、田村 1992 を参照されたい）。

     N         N -所有人称接辞

しかしここでその所有関係が譲渡可能とみなされる場合には、譲渡可能を示す接辞が現れ、次のような構造をとる。

     N         N -譲渡可能-所有人称接辞

次にみるのはナーナイ語の例で、Avrorin (1968) による。

(1) naj jili-ni

人 頭-所有人称接辞三人称単数 「人の頭」

(2) naj jili-ŋgo-ni

人 頭-譲渡可能-所有人称三人称単数 「人の（持っている何か獣などの）頭」

津曲（1992）は、「一般に譲渡可能な範疇として、自然物、野生動物、飲食物、親族以外の人間などが含まれるが、実際には部外者にとって正確な予測や一般化は必ずしも容易ではない。（中略）これに対して、身体部位、親族、家畜、位置や方向、身につける物、日常の道具などでは一般にこの接尾辞が付かない。場合によっては、付けることによって意味が変わる。」としている。

ここでツングース諸語における譲渡可能の接辞の分布とその形式をみると以下のようなようである。I、IIなどのローマ数字は Ikegami (1974) が主に音韻対応に基づいて分類した系統的な諸グループである。

	譲渡可能	典拠
エウエン語 (I)	-ŋ	Novikova(1960)
エウエンキー語 (I)	-ŋ/-ŋii	Konstantinova (1964)
ネギダル語 (I)	-ŋ/-ŋi	Cincius(1982)
ソロン語 (I)	なし	
オロチ語 (II)	-ŋi	Cincius(1949)

ウデヘ語 (II)	-ŋi	筆者調査による
ナーナイ語 (III)	-ŋgo/-ŋgu	筆者調査による
ウルチャ語 (III)	-ŋgu/-ŋgu	筆者調査による
ウイльта語 (III)	-ŋu	津曲 (1992)
満州語 (IV)	なし	
シベ語 (IV)	なし	

本稿では、まず譲渡可能の接辞に関する詳しい先行研究である Boldyrev (1976) の記述を紹介する。次に筆者が現在若干のテキストコーパスを使用できるウデヘ語 (II)、ナーナイ語 (III)、ウイльта語 (III) について譲渡可能の接辞が現れている例を調べる。しかるのちその結果と Boldyrev (1976) の記述を比べてその異同を検討しつつ考察を加えることにする。

### 1. 先行研究

まず Boldyrev (1976) は所有人称接辞などによる所有構造に、直接所有 (譲渡不可能的、本来的な所有) と間接所有 (譲渡可能的、非本来的、関係的な所有) の2種類を区別している。直接所有とは、一方が他方に直接に所属する場合か、切り離すことのできない部分を構成している場合で、この場合所有人称接辞のみが付き、譲渡可能の接辞は現れないという。他方間接所有とは、一方が他方に所属してはいるものの、さらに別の第三者の本来的な部分でもある場合で、この場合には所有人称接辞の前に譲渡可能の接辞が現れるという。また一時的な所有、条件的な所有であることを強調する場合にも譲渡可能の接辞が用いられるという。

所有する側の名詞について、Boldyrev (1976) は人間等に限られるとする説 (Avrorin 1959, Sunik 1947a) を紹介した上で、以下のような例外をあげている。

#### (3) [ナーナイ語]

mi boai duanta-ŋgu-ni luġji.

私の 地域の 森は 鬱蒼としている

次に Boldyrev (1976) は所有される側の名詞について、どんな名詞でも譲渡可能の接辞を取り得るとする説 (Cincius 1947, Sunik 1947b) があることを紹介しつつ、他方自身は所有される側の名詞を、以下のような三つのクラスに分類し (以下ではこれをA、B、Cクラスと呼ぶ)、これをさらに意味に基づいていくつかのグループに下位分類している。なお Boldyrev (1976) はナーナイ語のテキストから多くの例を集め、各グループにナーナイ語の語例もあげているが、本稿ではその訳だけ示す。

A 一般に譲渡可能の接辞が現れないもの

Aア 親族関係（父、母、兄、姉、祖父、祖母、おじ、おば、義父、義母、妻の姉妹の夫、いとこ）

Aイ 空間関係（中、上、頂上、高み、後、端、下）

Aウ 衣服、日常用具、生活必需品など（パイプ、櫛、シャベル、針、指貫き、鑢、櫛、網、かけ針、氷割りの棒、皮なめし具、女性用ナイフ、服、外套、ズボン、パンツ、手袋、耳当て、スカーフ、靴、銃、槍、サーベル、鋸、櫓、舟、スキー、机、椅子、オンドル、棚、鍋、洗面器、皿、毛布）

Aエ 物の部分を構成するような名詞（屋根、窓、戸、取っ手、敷居、梯子、煙突、ロウソクの芯、弓の弦、壁）

Aオ 抽象名詞（尊敬、生活、残念さ、悲しみ、苦勞、喜び、幸運、叫び）

B 直接所有の対象とも間接所有の対象ともなるもの、すなわち譲渡可能の接辞をとることも、とらないこともあるもの

Bア 体の部分（頭、足、髪、耳、目、鼻、首、筋肉、脳、腸、尾、心臓、舌、頬、皮、肝臓、骨、肺、額、卵、肉、唇、膝、血、胆のう、脂肪、涙、汗、垢、小便、泡、唾）

Bイ 職や社会的地位、年齢に基づく名称（妻、夫、若者、ムルゲン（民話中の男主人公）、女、奴隸、歌い手、主、魔物、敵、大工、名人、シャーマン、富者、獵師、隣人、読書家、長）

Bウ 植物やその部分、木や実やベリー類（木、細枝、草、粟、ブドウ、松ぼっくり、花、ベリー、葉、樹皮、根、梨、カラマツ）

Bエ 野生動物、鳥、魚、爬虫類、虫（イノシシ、ネズミ、ノロジカ、キツネ、ウサギ、クロテン、獣、黒雷鳥、白鳥、エゾヤマドリ、水鳥、フナ、カワカマス、魚、虫、蚊、甲虫、チョウ、ヘビ、なお家畜について、エウエンキー、エウエン、ネギダル、ウルチャ、ウイルタ、オロチ語では直接所有の例しかないが、ウデヘ語、ナーナイ語には例がある（犬を除く）。このことについて Boldyrev (1976) は、ツングースがかつては狩猟・漁労のみを行ない、家畜は犬のみであり、ツングース諸族が分岐したのち生業に変化が生じたために現在は言語によって違いが出ているものとみている。）

Bオ 地理的な名称（山、川、崖、小川、森、海、沼、大地、草原、湖、世界、島、港、湾、岸）

Bカ さまざまな物質及び食べ物、食糧、料理（土、石、砂利、灰、砂、金、鉛、氷、紙、火打ち石、粉、薬、玉石、鉄、食べ物、スープ、餃子、焼き串肉、粟、小麦粉、お粥、タバコ、酒、刺身、砂糖、小麦粉の平たい丸パン（レピョーシュカ）、さらにここにはロシア語からの借用語であるパン、牛乳、缶詰その他も入る）

- Bキ 時間名称 (年、月、日、夜、夕方、朝、時、春、夏、秋、冬)
- Bク 自然現象や天体 (太陽、月、雨、雪、雹、風、星、雲、霧、波)

C 間接所有の対象とはなりうるが、直接所有の構造では用いられないもの

- Cア 固有名詞
- Cイ 臨時に名詞的に使用された形容詞
- Cウ 臨時に名詞的に使用された数詞
- Cエ 臨時に名詞的に使用された指示代名詞
- Cオ 臨時に名詞的に使用された形動詞

この他に Boldyrev (1976) は、所有人称接辞による所有構造ばかりでなく、ナーナイ語であれば *-ko/-ku* 「～持ちの」、*-molial/-mulial* 「～と二人で」という接辞による別種の所有構造の中でも、これらの接辞の前の位置に譲渡可能の接辞が現れる (他の言語でもやはりこれらと対応する諸形式とともに譲渡可能の接辞が現れる) ことを指摘している (以下の筆者調査でもこのことは確認できた)。

## 2.1. ウデヘ語

筆者が現地調査で得た現在整理中のテキストから、譲渡可能の接辞 *-ŋi* の例は 158 例見出された。Boldyrev (1976) の分類に従い、数の多いものから順に示せば以下のごとくである (なお( )内の数字は用例の数で、一例のみであったものは数字をつけていない)。

Bイ 職や社会的地位、年齢に基づく名称 75 例

*ājiga*(23) 「女の子、少女」、*baata*(17) 「男の子、少年」、*mamaka*(10) 「妻」、*xatala*(7) 「娘」、*amba*(4) 「魔物」、*mafaasa*(4) 「老人」、*əxi*(2) 「(恋人の) 女」、*cougumiatu* 「チョーグミヤートウ (魔物の一種)」、*əəčə* 「奴隷」、*jəgdigə* 「若者 (民話の男主人公)」、*bəlio* 「若い女の子 (民話の女主人公)」、*nii* 「人」、*aanta* 「女性、女」、*odoko* 「老人」、*bəjə* 「人、奴」

Bエ 野生動物 (+家畜)、鳥、魚、爬虫類、虫 37 例

*mui*(9) 「馬 (家畜)」、*jaa*(7) 「牛 (家畜)」、*songo*(7) 「ヒグマ」、*kugəxi*(2) 「アカオカケス」、*waŋba*(2) 「カメ」、*gai*(2) 「カラス」、*nau* 「ニワトリ (家畜)」、*kuliga* 「ヘビ」、*ogbio* 「ヘラジカ」、*kianja* 「アカシカ」、*gaja* 「水鳥」、*tukca* 「ウサギ」、*nakta* 「イノシシ」、*kuti* 「トラ」

Bカ さまざまな物質及び食べ物、食糧、料理 31 例

*jeu*(6) 「食べ物」、*uli*(5) 「水」、*ai*(4) 「酒」、*jakta*(3) 「粟」、*too*(3) 「火」、*gampa*(2) 「油」

を使わない濃いお粥」、*galiŋa*(2)「小麦粉の平たい丸パン、レピョーシュカ」、*imo*「油」、*sata*「砂糖」、*čaja*「お茶」、*dajana*「大麻の丸薬」、*lugba*「布きれ、ボロきれ」、*mantoo*「饅頭」

Bウ 植物やその部分、木や実やベリー類 13例

*moo*(12)「木、薪」、*zauxu*「薪」

Cエ 臨時に名詞的に使用された指示代名詞 9例

*jəu/i*(6)「何」、*əi*「これ」、*tii*「あれ」、*aŋi*「(え〜と)あの」

Bオ 地理的な名称 5例

*kada*(2)「崖」、*oŋgo*「洞窟」、*sopka*「丘 (<ロシア語)」、*xokto*「道、狩猟のコース」

Cア 固有名詞 3例

*lɔtigə*(3)「ルティグ」

Cイ 臨時に名詞的に使用された形容詞 2例

*ŋicaa*「(もつとも)小さい者」、*əgdi*「たくさんもの」

Aウ 衣服、日常用具、生活必需品など(?) 2例

*ʒogbo*「銚」、*dia*「船」

Bア 体の部分 1例

*nia*「皮、毛皮」

Bキ 時間名称 1例

*waata-*「さつき(?)」

## 2.2. ナーナイ語

風間(1991、1993、1995、1996、1997、1998)のテキストから譲渡可能の接辞-*ŋgo/-ŋgu*の例は全部で190例見出された。なお複数接辞及び指小辞ははずして示した。

Bイ 職や社会的地位、年齢に基づく名称 47例

*ambaan*(11)「魔物」、*mapa*(4)「じいさん、老夫」、*nai*(3)「人」、*əlči*(3)「奴隷」、*saman*(2)「シャーマン」、*ʒariso*(2)「歌い手」、*sisima ʒuəli*(2)「シシマジユウリ(シャーマンの助手である神像)」、*kəkə*(2)「女奴隷」、*pūjin*(2)「プジン(物語の女主人公)」、*andaxa*(2)「客」、*ded*(2)「おじいさん(<ロシア語)」、*mama*「ばあさん、老妻」、*axa*「奴隷」、*paoso*「射手」、*giaktamʒi*「使い走り」、*koori*「鳳(伝説上の鳥)」、*arčokaan*「女の子、少女」、*əkərəmʒi*「食事の用意をする者、妻」、*əktə*「女性」、*səwəən*「スウン(シャーマンの助手となる神像)」、*piktə*「子供」、*naonʒokaan*「少年」、*ʒaŋgian*「長」

Bエ 野生動物、鳥、魚、爬虫類、虫 40例

*giu*(11)「ノロジカ」、*piičəən*(6)「トンビ」、*ʒabʒan*(5)「へび」、*sogdata*(3)「魚」、*bəjun*(3)

「大型の獣」、səəpə「クロテン」、dawa「サケ」、čəoloo「ヒヨコ」、gasa「水鳥」、borbočaan「オオジカ」、isoaka「カケス」、soli「キツネ」、singurə「ネズミ」、nəktə「イノシシ」、olgoma「大蛇」、oksara「フクロウ」、xoi「ヒキガエル」

Bカ さまざまな物質及び食べ物、食糧、料理 35 例

uliksə(9)「肉」、lala(4)「お粥」、jolo(3)「石」、damxi(3)「タバコ」、arki(2)「酒」、ixərə(2)「灯り」、paagdān(2)「干しザケ入りのお粥」、saori「鮑屑」、manto「饅頭」、kamdo「糊」、sijaan「砂、砂地」、oja「鉛」、jīəktə「粟」、boso「布」、simusə「油」、ojo「太い縄」、manaxa「魚皮の切れ端」

Bウ 植物やその部分、木や実やベリー類 31 例

moo(13)「木一般、薪」、amtaka(5)「ベリー一般」、siŋəktə(4)「エゾノウスミズザクラ（ベリーの一種）」、sunpun(4)「谷地坊主」、nuutə(2)「松脂」、daačan「根」、gaakta「ツルコケモモ」、pata「倒木」

Bオ 地理的な名称 14 例

marbo(4)「大河」、xoŋko(4)「絶壁、岩」、sulien(2)「スリウンの丘（固有名詞か?)」、oni(2)「小川」、amoan「湖」、xurəən「山」

Cイ 臨時に名詞的に使用された形容詞 12 例

xačin(4)「さまざまな（言葉）で（道具格とともに）」、kusuŋku(2)「力持ちな」、masi(2)「強く（道具格とともに）」、xəməə(2)「黙って（道具格とともに）」、kasaa daai「大きなカサー（回忌）をする（シャーマン）」、təŋ tən daai「もっとも偉大な（シャーマン）」

Cア 固有名詞 6 例

čooŋboka(2)「チョーンボカ」、aŋgəjaka「アングジャカ」、kukəkəən「ククー人形」、səwdəkə「スウドック」、tonika「アントニーナ」

Cエ 臨時に名詞的に使用された指示代名詞 3 例

xai(3)「何」

Bキ 時間名称 2 例

siksə「夕方」、ini「日」

### 2.3. ウイルタ語

池上（1984）には譲渡可能の接辞-ŋuの例は40例あった。例の多かった順に並べると以下のようである。訳はテキスト本文の訳及び池上（1997）を参考にした。

Bイ 職や社会的地位、年齢に基づく名称 12 例

kaŋjami(4)「カルジャメ（大男の怪物）」、mama(3)「老妻」、andaxa「客」、baja「もの

もち(金持ち)」、*eekkuččee*「かじがいをとるもの」、*mapa*「じいさん(老夫)」、*amba*「怪物」

Bエ 野生動物、鳥、魚、爬虫類、虫 10例

*bəje*(5)「クマ」、*pəətə*(2)「アザラシ」、*gaaki*「こどものからす」、*nəəçikə*「こどものことり」、*ŋinaka*「こどものいぬのこ」

Bカ さまざまな物質及び食べ物、食糧、料理 5例

*xorko*(2)「つな」、*saŋna*「タバコ」、*mauri*「魚の背骨にそった切り身」、*natta*「獣の皮」

Bオ 地理的な名称 5例

*uni*(3)「川」、*omoo*「湖」、*nəə*「海に入る大きな川の河口近い部分」、

Cエ 臨時に名詞的に使用された指示代名詞 4例

*čəŋ*(2)「あれ」、*tari*「それ」、*anu*「(え〜と)あれ」、

Bウ 植物やその部分、木や実やベリー類 1例

*naukta*「靴につめる草」

Bキ 時間名称 1例

*dolboni*「夜」

Bク 自然現象や天体 1例

*boo*「天気」

Cア 固有名詞 1例

*səkseenu*「シヨクシヨヌ」

Cイ 臨時に名詞的に使用された形容詞 1例

*manga*「剛の(者)」、

### 3. 考察

#### 3.1. 譲渡可能の接辞をとる名詞

まず三言語での調査の結果を比べてみる(例の少ないグループは省略した)。

ウデヘ語	Bイ(75) Bエ(37) Bカ(31) Bウ(13) Cエ(9) Bオ(5) Cア(3) Cイ(2)
ナーナイ語	Bイ(47) Bエ(40) Bカ(35) Bウ(31) Bオ(14) Cイ(12) Cア(6) Cエ(3)
ウイルタ語	Bイ(12) Bエ(10) Bカ(5) Bオ(5) Cエ(4) Bウ(1)

Bイ (職や社会的地位、年齢に基づく名称)、Bエ (野生動物、鳥、魚、爬虫類、虫)、Bカ (さまざまな物質及び食べ物、食糧、料理)、がこの順序で多いことは三言語で一致している。次いで、Bウ (植物やその部分、木や実やベリー類の名前)、Cエ (臨時に名詞的に使用された指示代名詞)、Bオ (地理的な名称)、などが多いことがわかる。

なぜこのような名詞のグループが譲渡可能の接辞をとりやすいのか、ということについて以下考えていく。

譲渡可能なものとして我々が普通考えるのは、まさしく与えたり、獲得したり、捨てたりできる「消耗品」的な「物」ではないだろうか。確かにBエの狩猟対象としての野生動物、Bカの食べ物（水や酒、タバコ）、Bウの採集対象としての植物（特に薪やベリー）、などは消耗品と考えるにふさわしいものであろう（それぞれ2位以下上位を占めている）。またこれらは人間界に対する自然界に属するものであり、人間が手を加えて作った道具（A4）などとは違って本来的には誰の物でもない、と考えることができるのかもしれない。

しかし他方どの言語でも最も例が多いのは親族を示す名詞をも多く含むBイの「人」を示す名詞群である。さらに「譲渡する」というようなことが考えがたいBオの地理的な名称、Bキの時間名称、Cイ及びCエの臨時に名詞的に使用された形容詞や代名詞の例がどの言語にも存在することがわかった。これらは Boldyrev(1976)のいうような「第三者であるところの本来の所有者」が別にいるとも考え難い。これらの名詞にはなぜ譲渡可能の接辞がつくのだろうか。

澗瀾(1981)には次のようなウイльта語の文例が興味深い訳とともにあがっている（訳も原文のまま）。

(4) geeda-**ŋu**-či                      uuččini.

（皆の中の）一人が      言った

(5) sii-**ŋu**-či                              mastta    toŋdo    nari.

（沢山の中で）お前こそは      真正直な      人だ

(6) uilta-**ŋu**-či    lautamba    tooččini.

ウイльтаは（ア奴、ギリヤク、日本人、ウエンキ等の皆の中のウイльтаは）太刀を      抜いた

これらの例では所有者と被所有者の関係は、「等質のものからなる全体の集合」と「その一構成員」という関係になっている。

このような「等質のものからなる全体の集合」の存在、という観点から他の例を再考してみる。以下ではCイ、Cウ、Cエ、Bク、Bキ、Bオ、Bイ、の順にみてゆく。

Cイの名詞的に用いられた形容詞について、boldyrev(1976)はその項に 10 個の例文をあげているが、そのうち2例以外は「等質のものからなる全体の集合」が明示的に現れている。

(7) [ナーナイ語]

mindu    ʃuər    karandaš    bičini,    mi    ʃiaji    gələxəni,    buru    mindu    səǰǰə-**ŋgu**-ji.

私に    二本の    鉛筆が    あった、私の    仲間が    求めた、くれよ、オレに    赤いのを

boldyrev(1976)はさらに、名詞化せずに普通に名詞を修飾している形容詞にも、「その形容詞に特別な注意が向けられる、すなわち論理的な力点が置かれる場合」には譲渡可能の接辞が現れることがあるとして9例をあげている（なおその例はI群の言語のみである）が、その4例は以下のようないわゆる最上級の文である。



(8) [ネギダル語]

bi sændičaaw jij ŋənəmu-ŋi-tin geewulwa.

私は 選んだ、最も それらのうちの長いのを 權を

Cウの名詞的に使用された数詞も、boldyrev(1976)のあげる6例中の5例には「等質のものからなる全体の集合」が明瞭に現れている。

(9) [オロチ語]

noŋatidu ila nasa bičini, omoni-ŋi-ti sakai, juwi-ŋi-ti čəkkə, ilawi-ŋi-ti soŋjo.

彼らに 三枚の毛皮があった、一つ目は 黒、二つ目は 白、三つ目は 魚皮

Cエの名詞的に使用された指示詞、及び形動詞にも同様のことが言える。

Bクの自然現象や天体について、潤瀉(1981)には次のような例があがっている(訳もそのまま)。

(10) [ウイルタ語]

boo-ŋu-pu dolboduxani.

(我々の気にしている) 空は 夜になった

筆者はこのような場合、他方に「我々の気にしていない(もしくは気にしていなかった)空」があり、それらとの対比があって、やはり「等質のものからなる全体の集合」が話者に意識されているのではないかと考えたい。ただこの場合は boldyrev(1976)のいうような「一時的、条件的な所属」と考えた方がピッタリする気もする。テキストから得られた唯一の例(池上 1984)と boldyrev(1976)の例も1例あげておく。

(11) [ウイルタ語]

gəə, əri boo-ŋu-pu mənŋa orkii, məə dooni soktoonjinee,

さあ、この おれたちの天気が ひどく 悪い、水の中が にごってくるぞ

(12) [ナーナイ語]

siu-ŋgu-sdə ələ tuguəskə!

おまえの太陽も もう 沈んでしまうぞ!

Bキの時間名称について筆者が得た例をみると次のようである。

(13) [ナーナイ語]

xatambi osini, piktəji ərdə isjjaəčia,

速い なら、自分の子供の所に 朝早く 着くでしょう(あなたは)、

əkəči ənəi osini siksə-ŋgu-ji isjjaəčia,

遅く 行く なら あなた自身にとっての夕方に 着くでしょう

(14) [ナーナイ語]

xujuəčie ini-ŋgu-duji ilələ sənəguxəni.

九日目の日に 半分 目がさめた

(15) [ウイльта語] (池上 1984)

xooniddaa xaijitamari idamari ilaalta aundaačinda.

なんとか しようとしても かいなく 三晩 彼らは泊まったと

illee dolboni-**ɲu**-lli tolčičixandaa tari mapaačča tari amba unjjiwəni.

三日目の 夜に 夢をみたと、その じいさんが その 化け物が 言うのを

一つ目の例では朝との対比があり、下の序数詞の現れる2例では「等質のものからなる全体の集合」の存在が感じられる。池上(1997)の次のような例も、譲渡不可能な身体部位に近いものとしてではなく、二十番目の年、という意識で使われているものであろう。

(16) [ウイльта語]

mini anani-**ɲu**-bi xori anani.

おれの 年は 二十 歳だ

Bオの地理的な名称に関しては、はっきりと「等質のものからなる全体の集合」が文中に現れている例は見出せなかった。ウイльта語のこれらの例について池上(1984)は、「自分のさかなとりしているみずうみ」や「自分の(毎年行く)川」のような訳を付している。ナーナイ語やウデヘ語の例も同様のものが多い。これらについて、まだはっきりしたことは言えないが、やはり他の多くの「自分がさかなとりをしないみずうみ」や「自分が行かない川」との対比を話者が意識している、という可能性を考えたい。

最後に、もっとも例の多かったBイの人間を示す名詞、Boldyrev(1976)のいう「職や社会的地位、年齢に基づく名称である名詞」について考える。調査の結果、多くみられたのは次のような名詞であった。すなわち本来「おじいさん」や「おばあさん」を示すが文中では「夫」や「妻」を意味して用いられる語(ナーナイ語ならmapa, mama)、それに「魔物」、「客」などの例が多かった。ウデヘ語では、本来単に「男の子」や「女の子」を指す語で文中では自分の「息子」や「娘」を指す語(ājiga, baata)も多かった。

また分類上は一般常識からナーナイ語で「ノロジカ」、「トンビ」、「ヘビ」などを、ウデヘ語で「ヒグマ」、「カメ」、「カラス」、「ヘビ」、「トラ」などを野生動物のグループに入れたが、これらは実際の文中では民話の登場人物で、人間と同じように人間のことばをしゃべり、多くの場合人間の妻を得たのちその覆いを脱いで人間に変身する。特にウデヘ語の「ヒグマ」、「トラ」、「カメ」はそれぞれヒグマとトラと一人の獵師の三者だけが登場人物の短い民話、リスとカメの二者だけが登場人物の短い民話のペアとなった登場人物である。

このような結果が得られたBイのグループの名詞が譲渡可能な接辞を多くとることについて、きわめて不十分ながら、次の2つの考えを提出しておきたい。

第一に、これらが「相手」を示す点で共通していることについてである。池上(1984)はやはりこうした人間等を示す名詞が譲渡可能な接辞をとったものに、例えば「彼の相手のカルジャメ(大男の怪物)」のような訳を当てている。「夫」や「妻」、「魔物」、「客」など

はまさしくある者にとって「相手」となるべき存在である。

「相手」とは、独立した人物が臨時にある特定の人物と関係づけられる、ペアにされる、と言いかえることもできよう。したがって「対等な人物たちからなる全体の集合（この場合は、ペア）」の中で、一方が他方に関係づけられて語られる時（つまり「相手」として意識される時）、譲渡可能の接辞を伴った所有表現が多く用いられているとみることができるのではないだろうか。

第二に、先に述べたように譲渡可能の接辞をとって現れ、文脈上「夫」や「妻」や「息子」、「娘」を意味する語は、それらが本来の意味ではなく、もともとはより広い意味、すなわち「おじいさん」、「おばあさん」、「男の子」、「女の子」を示す語であった。他方例えばナーナイ語には $\text{aji}$ 「夫」、 $\text{asi}$ 「妻」、 $\text{pikt\ddot{a}}$ 「(実の) 子供」、ウイルタ語には $\text{aji}$ 「夫」、 $\text{asi}$ 「妻」、 $\text{putt\ddot{a}}$ 「(実の) 子供」、ウデヘ語には $\text{sit\ddot{a}}$ 「(実の) 子供」、という本来的な親族名称とみなすべき語がある。これらの語は使用頻度も高いが、譲渡可能の接辞を伴った例は一つも見出されなかった（このことについては次の3.2で触れる）。津曲（1992）によれば、エウエンキー語で $\text{asi-w}$ といえは「私の妻」だが $\text{asi-nji-w}$ といえは「私の女」、エウエン語で $\text{xut\ddot{a}-n}$ といえは「彼の息子」だが、 $\text{xut\ddot{a}-nj-\ddot{a}n}$ といえは「彼の息子のような者」という意味になるという。このことについて以下のように考えたい。すなわち「夫」という明確な意義を有している語であれば、「私の夫」といえはそれは一義的に一人の人物に決まる。しかし「おばあさん」のような意味の語では「私のおばあさん」といっても世の中にはたくさんの老婆がいるのであって、その中から問題の文脈の中で自分に関連付けられたおばあさんが一人特別に選択されることになる。つまりこのことはその背景に「対等な人物たちからなる全体の集合」があると考えられないだろうか。

### 3.2. 譲渡可能の接辞をとらない名詞

譲渡可能の接辞をとらない名詞として、Boldyrev（1976）は以下の5つのグループをあげた。すなわち、Aア（親族関係）、Aイ（空間関係）、Aウ（衣服、日常用具、生活必需品など）、Aエ（物の部分を構成するような名詞）、Aオ（抽象名詞）、である。

調査の結果、ウデヘ語にAウと考えられる2例（ $\text{jogbo}$ 「鮎」、 $\text{dia}$ 「船」）が見つかった以外は、たしかにこれらの名詞が譲渡可能の接辞をとった例は皆無であった。

ではこれらの名詞はなぜ譲渡可能の接辞をとらないのだろうか。以下ではAイ、Aアの二つのグループをとりあげて考察を加えることにする。

Aイの空間名詞とAアの本来的な親族名称は、「基準を必要とする相対的な意味を持つ名詞」とみることができるのではないだろうか。Aイの空間名詞の方にそれはよりはっきりと観察される。そのことを以下にまず説明しよう。

たとえば我々は日本語で「前」なら「前」という語が、なんらかの確定した意味を持つ

ているかのように感じている。しかし実際に文中で用いられる際には、その基準となる場所が決まらない限り、その「前」という語が具体的にどこを指しているのかわからないであろう。「彼の前」といった場合、彼が移動すれば、世界中のどこでも指し得ることになる。

このことは指示代名詞や「行く／来る」などで問題にされる直示 (deixis) とも関係がある事だが、少し異なった問題である。すなわち「彼の前」の場合、「彼」がどこにいるか、は確かに発話された時の言語外的な状況に直接依存するが、「前」という語がどこを指すかは「彼」のいる場所によって規定されるのであって、直接発話時の状況に規定されるわけではない。したがって上に示した「相対名詞」という用語を用いるのが適当であろう。

「相対名詞」という用語はすでに松下大三郎が意味的特徴から名詞を分類した際にこの用語を用いている。しかし統語的な振る舞いの違いから、名詞のグループとしてこれを客観的に捉えられる形で確立したのは寺村 (1977) である。すなわち、寺村(1977)によれば、相対性をもった名詞が底の名詞となって形成された日本語の連体修飾節では、修飾部分はその「基準」として働く。次の(17a)のような例を(17b)のような例と比べて見ればわかりやすいだろう。

(17a) 太郎が座った後ろに花子が座った (相対名詞を底とした外の連体修飾節)

(17b) 太郎が座った椅子に花子が座った (内の関係の連体修飾節)

(17b)では太郎が座ったその同じ椅子に花子も座ったのであるが、(17a)では太郎は後ろに座ったのではなく、花子の前に座っていたのであり、それに対する「後ろ」に花子は座ったのである。このようなことは相対性を持つ名詞が連体修飾節の底の名詞になった場合に生ずる。

同様に名詞間の修飾構造においても、「彼の前」という句は「彼の本」のような句とはその関係において大きく異なる。同じ「AのB」という構造をしていても、「彼の前」が示している事態は「基準Aに関して相対的に決まるB」であって、「Aという人物が譲渡可能あるいは不可能なBという物を所有している」というような用語で説明される事態とは程遠い。まず先述したように「前」は「本」のような具体的意味を持たない。したがってその基準を必須のものとして要求する。日本語のような言語では、例えば「突然前が見えなくなった」とか「後ろに誰がいるような気がする」などのように表面上は必ずしも基準を示す名詞が現れないことがある。しかし、その基準は存在し、状況や文脈から特定されるものと考えられる。

ツングース諸語で空間名詞が譲渡可能の接辞をとらない理由は、それが相対名詞であって、その関係が「所有」ではなく「基準」であることにあるのではないだろうか。

Aの親族名称も、相対性を強く持っていると考えられる。「(誰かの実の) 子供 (つまり息子か娘)」という語は、理屈の上では全人類の誰でも指し得る。他方内包する意味は希薄である。「父」、「弟」のような語になれば、その示し得る外延は男性であって、子供もし

くは上の兄弟を持つ者のみに狭められる。他方内包する情報量は増える。このように程度差がある点、空間名詞よりその相対的な性格は落ちるかもしれない。しかし程度は異なっても、基準となる人物を前提とした名詞であることには変わりがないだろう。この点、「若者」や「老人」、「召使い」などの語は同じように人間を示す語であっても、基準を必要とせず、絶対的な意味特徴を持っている。ただ日本語では「おじさん」、「おばあさん」などの語が血縁ではない「中年の男性一般」や「老婆」のような意味を持ち得る点で、その境界があいまいになっている。ツングース諸語では両者の文法的な取り扱いが異なるので、その境界にははっきりとした線が引かれているということになる。

このように「相対性」という観点から説明すれば、ツングース諸語において、なぜ空間名詞と親族名称がともに譲渡可能の接辞をとらないかが、統一的に説明できると考える。

さらに筆者は、こうした「所有物に対する所有者」と「相対名詞に対する基準」という二つの関係の違いは通言語的にも重要で、両者の表現形式が異なる言語が他にも多く存在するのではないかと考えている。

津曲(1992)に指摘があるが、中国語、朝鮮語、アイヌ語において、より譲渡可能な所有関係で用いられる-de, -tui, korのような要素は、空間名詞(もしくはこれらの言語の記述で位置名詞と呼ばれているもの、内容はほぼ同じ)の前では決して用いられない。アイヌ語ではさらに、普通名詞の人称形を作るには他動詞につく主格人称接辞が用いられるのに対して、空間名詞には他動詞につく目的格人称接辞が用いられるという(田村 1988)。中国語では親族名称が人称代名詞で修飾される場合には普通-de が用いられない。相対名詞という観点から、これらの現象を捉え直すことを提案したい。

#### 4. 結語

本稿ではツングース諸語における譲渡可能を示す接辞の現れについて、テキストコーパスを用いて先行研究の主張を検証した。

その結果、以下のようなグループの名詞に、ほぼこのような順で譲渡可能を示す接辞が多く用いられることが確認された。

Bイ (職や社会的地位、年齢に基づく名称)、Bエ (野生動物、鳥、魚、爬虫類、虫)、Bカ (さまざまな物質及び食べ物、食糧、料理)、Bウ (植物やその部分、木や実やベリー類の名前)。

Bエ、Bカ、Bウについては、従来通りの「譲渡可能で消耗品的な自然物」という見方で説明し得ることをみた。その他のグループの名詞がなぜ譲渡可能の接辞をとるのかに関しては「等質のものからなる全体の集合」の存在をその背景に仮定することを提案した。

他方、以下のようなグループの名詞は譲渡可能の接辞をとらないことも確認された。

Aア (親族関係)、Aイ (空間関係)、Aウ (衣服、日常用具、生活必需品など)、Aエ (物

の部分構成するような名詞)。

このうち Aイ、Aア に関しては、これらが「相対名詞」という共通点を持つことを指摘し、そのことが譲渡可能の接辞をとらない原因ではないかと考えた。

#### 参考文献

- 池上二良 1984 『ウイльта口頭文芸原文集』 札幌 北海道教育委員会。  
\_\_\_\_\_ 1997 『ウイльта語辞典』 札幌 北海道大学図書刊行会。  
風間伸次郎 1991 「ナーナイ語テキスト」 『ツングース言語文化論集 1』 黒田信一郎・津曲敏郎編, 札幌 北海道大学文学部。  
\_\_\_\_\_ 1993 『ナーナイ語テキスト』 ツングース言語文化論集 4, 小樽 小樽商科大学言語センター。  
\_\_\_\_\_ 1995 『ナーナイの民話と伝説』 ツングース言語文化論集 5, 小樽 小樽商科大学言語センター。  
\_\_\_\_\_ 1996 『ナーナイの民話と伝説 2』 ツングース言語文化論集 8, 鳥取 鳥取大学教育学部。  
\_\_\_\_\_ 1997 『ナーナイの民話と伝説 3』 ツングース言語文化論集 8, 東京 東京外国語大学。  
\_\_\_\_\_ 1998 『ナーナイの民話と伝説 4』 ツングース言語文化論集 12, 北方ユーラシア言語文献資料 第3分冊, 千葉 千葉大学。  
田村健一 1992 「ツングース語の属格表現」 『言語研究』 101, 東京 日本言語学会, 169-70。  
田村すず子 1988 「アイヌ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典』 第1巻, 東京 三省堂, 6-94  
津曲敏郎 1992 「第12章 所有構造と譲渡可能性: ツングース語と近隣の言語」 宮岡伯人編 『北の言語: 類型と歴史』, 東京 三省堂, 315-26。  
寺村秀夫 1977 「連体修飾のシンタクスと意味—その3—」 『日本語・日本文化』 6号 大阪 大阪外国語大学留学生別科。(寺村 1993 『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編』, 東京 くろしお出版. に所収)  
澗瀨久治 1981 『ウイльта語辞典』 網走 網走市北方民俗文化保存協会。  
Avrorin, V. A. 1959 *Grammatika Nanajskogo jazyka I*. Leningrad, Izd. AN SSSR.  
\_\_\_\_\_ 1968 *Nanajskij jazyk, Jazyki narodov SSSR 5*, AN SSSR, Leningrad.  
Boldyrev, B. V. 1976 *Kategorija kosvennoj prinadlezhnosti v tunguso-man'chzhurskix jazykax*. Izdatel'stvo nauka, Moskva.  
Cincius, V. I. 1947 *Očerki grammatiki evenskogo jazyka*. Leningrad.  
\_\_\_\_\_ 1949 *Očerki morfologii orochskogo jazyka*. *Uchenye zapiski LGU*, No.98 (Serija vostokovedcheskikh nauk, vyp. 1, Leningrad).  
\_\_\_\_\_ 1982 *Negidal'skij jazyk*. Nauka, Leningrad.  
Ikegami, J. 1974 *Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen*. *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*. Berlin, Akademie-Verlag, 271-2.

- Kolesnikova, V. D. i O. A. Konstantinova 1968 *Negidal'skij jazyk. Jazyki narodov SSSR5*, Leningrad, AN SSSR.
- Konstantinova, O. A. 1964 *Evenkijskij jazyk*. izdatel'stvo Nauka, Moskva-Leningrad.
- Novikova, K.A. 1960, 1980 *Očerki dialektov evenskogo jazyka (v 2 tomax)* AN SSSR, Moskva-Leningrad.
- Sunik, O. P. 1947a *O kategorii otchuzhdaemoj neotchuzhdaemoj prinadlezhnosti v tunguso-man'chzhurskix jazykax*. Izv. AN SSSR, OLJA.
- \_\_\_\_\_ 1947b *Očerki po sintaksisu tunguso-man'chzhurskix jazykov*. Leningrad.

### On the suffix of alienability in Tungus languages

Shinjiro KAZAMA

(Tokyo University of Foreign Studies)

#### 0. Introduction.

The possessive construction of Tungus languages is of the Head marking type (except in Manchu, Sibe, and Solon).

If N(oun)<sub>2</sub> is inalienable, the construction is   N1     N2   -person

If N(oun)<sub>2</sub> is alienable, the construction is   N1     N2   -alienable-person

(1) naj ĵili-ni

*man head-3sg.* "A man's head"

(2) naj ĵili-ŋgo-ni

*man head-alienable-3sg.* "A head which a man has (such as the head of an animal)"

#### 1. Previous research.

Boldyrev(1976) divided nouns into three groups.

Group A are nouns which never take the suffix of alienability. Group A includes subgroups as below.

A1-Kinship terms, A2-Locational nouns, A3-Commodity, A4-Parts of objects, A5-Abstract nouns.

Group B are nouns which may take the suffix of alienability.

B1-Body parts, B2-Occupation or social status, B3-Plants, B4-Wild animals, B5-Nouns of places, B6-foods, B7-nouns of time, B8-Heavenly bodies and natural phenomena.

Group C are nouns which always take the suffix of alienability.

C1-Proper nouns, C2-Adjectives which used as nouns casually, C3-Numerals,

C4- Demonstrative pronouns, C5-Verbal nouns.

### **2.1. Udehe**

The following examples are from an unpublished Udehe text-corpus which I collected. The numbers are those of the examples.

B2(75) B4(37) B6(31) B3(13) C4(9) B5(5) C1(3) C2(2) B1(1) B7(1)

### **2.2. Nanay**

The following examples are from Kazama(1991, 93, 95, 96, 97, 98).

B2(47) B4(40) B6(35) B3(31) B5(14) C2(12) C1(6) C4(3) B7(2)

### **2.3. Uilta(Orok)**

Following examples are from Ikegami(1984).

B2(12) B4(10) B6(5) B5(5) C4(4) B3(1) B7(1) B8(1) C1(1) C(2)

## **3. Consideration**

### **3.1. The groups of nouns which take the suffix of alienability**

When I examined the examples of C2, C3, C4, and B3, I found these sentences have the meaning of *selection* from the set of the members of the same quality. I supposed that this is one of the reasons why these nouns take the suffix of alienability.

### **3.2. The groups of nouns which never take the suffix of alienability**

Locational nouns(A2) and Kinship terms(A1) have semantically relative (as opposed to absolute) character. Here I supposed that this is one of the reasons why these nouns never take the suffix of alienability.

## **4. Final remarks.**